

2021 年第 23 回ワールドユースミーティング報告

ワールドユースミーティング

概要

World Youth Meeting (WYM) 2021 年度は、Covid19 の影響を強く受け、コロナ禍での 2 年目のイベントとなった。

教育におけるデジタルトランスミッションの活用が本格的となった。これまでの先輩たちの作品を web 上で参照し、到達イメージを把握することを可能とした。また TEAMS と LINE などのテレビ会議システムでの国際交流の方法を参加校で共有し、準備段階でネットワーク活用を活性化させた。文部科学省が提唱する遠隔教育、パンデミック時の取り組みとしてのテレビ会議システムの指針を活かし、発表当日に向けて、国際連携を強めながら国内、国外双方でタスクベースな活動を展開した。その作品を発表する場がオンラインでのワールドユースミーティングである。

パンデミック下、場所的隔たり、言語的隔たり、文化的隔たりを ICT と国際連携力で打ち破った取り組みとなった。

今年度は各国学校閉鎖が行われていることもあり、一カ月前からセミナーを開催し、WYM 国際連携のノウハウをさらに積み重ねることが出来た。また、参加国で時差があったものの、WYM セミナーは 8 回開催され今年度の WYM の準備を行った。

大会テーマは“Regeneration and Sustainability”

-How can you be responsible for attaining Sustainable Development Goals-であった。

参加国は日本、ベトナム、中国、インド、台湾、カンボジア、マレーシア、フィリピン、タイ、韓国、ネパール、インドネシア、ミャンマーなどであり、日本と海外グループ合計 45 グループがチームを作り、テーマに沿った発表を行った。

1 WYM の目的

1-1 意見を持つ

国内 19 校、海外 38 校合計 57 校が参加した。これまでのプレゼンテーション作成の作品に学び、今年度はより責任ある発言を求めた。SDGs がテーマであり、単なる”調べ学習の発表“に終わらない、自分の周囲と SDGs との関連を問い直し、意見を述べることを奨励した。そのため、Presentation with Responsibility を評価基準に入れた。

意見とは、自分の生活の振り返り、関連分野のリサーチ、そこから踏み出す方向性を言語化し、他者に問いかける事であり、自己変容へのメッセージである。テーマが SDGs そのものであることから今年度の WYM はそれを“英語で行う”挑戦であった。18 歳で選挙権があたえられる我が国の青少年には取り組べき絶対課題と考える。WYM の参加者は 16-22 歳の高校生、大学生である。

WYM は語学の大会ではなく、グローバル人材育成の場であり、アジア、世界に起きている諸課題を担い、ともに“責任ある発言”を交換し、より創造的な方向を探り、支えあう大会である。今後もこの視点を継続して行きたい。

1-2 英語活用力の育成

「学んだが使えない、使う場所がない」という英語を外国語として学ぶのは日本だけではない。そのような国は、韓国、カンボジア、台湾、ネパール、インドネシアなどアジアには多い。Covid19 への対応、民主主義、人権、平和、地球課題に若者たちは立ち向かい、問題解決を図らなければならない。英語のコミュニケーション力で論議するしかない。日本の生徒、学生など基本文法、基本単語が備わっている側面はおおききに活用し、“発話の力”“情報共有、切磋琢磨”のための言語として、WYM ならず様々な場面で意識的に英語でのディスカッションがなされるべきであろう。学部を問わない、学校種を問わない交流のば論議の場は今後ますます必要となっていく。まして ICT 活用という、コミュニケーションを大きく支える Visual First なプレゼンテーションの追及は今年どのディスカッションを促進させた。

Post コロナではますます英語の発話機会が生徒学生に増えていくだろう。英語話者を育て、「英語活用体験」を得て、“生涯英語を使う日本人”を育てる場面となることを願っている。

そのような活動が、アンケート結果にも”国際的な友情、共感”を得たことが示されている。

1-3 自らを育てる ICT 活用

3 つのステージで WYM は展開されている。事前の準備のフェーズ、オンラインの活動、イベント終了後のリフレクション場面である。この展開を参加校で共有し、国際連携の基本形を大切に、これまで実践してきた。

協働における Cognitive Presence（どうデータを使うか）を考えながら、最適化された ICT 活用を展開している。今年度は特に、昨年好評であったディスカッションビデオクリップの数を増やした。より論議を深めるための工夫として、高校 9 校により 2、3 分程度のビデオが制作された。これらを視聴したあと、この素材を基に、メンチメーター等ネットワークアンケートをつかい、見える化で論議を促進させることができ、多くの参加者に参加した達成感を与えることが出来ていた。

1-4 参加者たちの国際連携力

ワールドユースミーティングの当日に向けての準備は生徒学生だけではなく、教員にとっても大きな国際連携力を磨く場面となる。相手国との連携は大変困難であるが学校教育力を高めるために必要不可欠な作業となる。教員自らも、自己の国際連携力養成の場面として WYM を活用し、やがては個々の学校を軸として、独自の国際連携授業の展開が期待できる。

スケジュール調整、作品の進行状況のチェックそしてオンラインでの発話練習指導など教員は相手側担当者と連携をとりながら各校の実情に合わせて自主的な国際連携を展開する。インターネットベースの国際連携プロジェクトは教師そして学生生徒にとってグローバルマインド資質を養成する大きな機会となっている。

2 オンライン開催をさせるネットワーク

2.1 利用した Web 会議システム

Web 会議システムとして、参加国の事情を踏まえ、Microsoft Teams を利用することとした。前年度には、Zoom を一部で併用することとしていたが、プログラム編成上の柔軟性を確保するためにも Teams で統一することとした。主催校である日本福祉大学では、Teams のライセン

ス（大学で利用する Microsoft ライセンスの一部）も保有しているが、通常時ではその機能が有効化されていないため、システム部門に必要アカウントについて有効化の処理を依頼し、対応していくこととした。

2.2 オンライン会議室の設定・運営

オンラインの会議室ごとに、担当の学生を複数割り振った。当該の学生が自身のパソコンを用い、会議室の設定、アドレス（URL）の確定、当日の運営を実施することとした。全体セッションについては、Teams のアクセス上限を超えてしまうことが懸念されたため、Teams を活用するパソコン画面を YouTube Live にて配信することとした。これら、担当学生が設定した情報を Google ドライブ内の共有ファイルに集約の上、Web を担当する係

Day2: August 6th

- Opening Session 10:00~

[Microsoft Teams](#)
(Speakers only)

[YouTube Live](#)

- Discussion Session 12:30~13:00

- [Room A: Rits J & S: #3 Good Health And Well-being: \[video\]\(#\)](#)
- [Room B: Rits J & S #4 Quality Education: \[video\]\(#\)](#)
- [Room C: Rits J & S #7 Affordable And Clean Energy: \[video\]\(#\)](#)
- [Room D: Rits Uji: #2 Zero Hunger: \[video\]\(#\)](#)
- [Room E: Fukui Com: #2 Zero Hunger: \[video\]\(#\)](#)
- [Room F: Nara Ikuei: #4 Quality Education: \[video\]\(#\)](#)

により図のような Web ページが整備された。なお、今回の方式の場合、YouTube Live の配信用のパソコンには、特にネットワーク回線の安定性が求められるため有線 LAN 回線を確保した。

2.3 今後に向けて — 困難・反省点等 —

Teams による会議室の運営、YouTube Live による配信、どちらも、機能の確認を行った上でリハーサルを繰り返し、概ね、適切に対応できた。ただし、日常的に使い込んでいるシステムではないこともあり、細かな点で十分に配慮しきれず、当日に試行錯誤がする部分が残ってしまったのが反省点である。具体的には、プレゼンの途中で入室する参加者がいた場合、今回の当初の設定では、プレゼン実施者の画面にも入室承認を求めるポップアップが表示されてしまった。参加校からの情報提供も受け、迅速な対応により善処したことは評価できると考えるが、本来であれば、事前に十分なシミュレーションを行っておくべきことであろう。システム活用の経験が蓄積される一方で、WYM の進歩のため、今後も新たなシステムを活用することになると思われるため、この点は肝に銘じておきたい。

日本福祉大学 国際福祉開発学部 教授 佐藤慎一

3 スタートアップレクチャー

今回のレクチャーの内容は、SDGs に近づくために我々がこれからどのようなことに取り組むべきかを確認させるために“Becoming sustainable-students”という案を基に構成した。皆がSDGsの目標を達成するために様々なかたちですすでに取り組んでいるものの、時々個々の取り組みの進展が減速したり忘れてしまったりする。例えば、私個人の場合、意識している

ものの買い物の際にマイバッグを忘れたり、使わない時に部屋の電気消灯を忘れたりする。そこで、個々の取り組みを継続的に行うために私たちがどのようなことをするべきかを大会参加者に考えさせることを意識した内容で構成した。今回の大会の参加者全て、学生・教職員・その他の関係者が‘継続的な学生’になる必要があると提案した。‘学生とは’と検索すると‘学問をしている人・知識を得ている人等’様々な定義や焦点を当てたものがある。その多くは、学校教育を指している。しかし、ここで意味している“Becoming sustainable-students”とは、学校教育に限定されず、日常的に“learn, adapt, apply, and master”に取り組む者である。従って、特定の学校や課程に属さなくても皆がみんなで日々“持続性を持った学生”であり続けることが重要である。

そのために、まず本大会を通してどのようなことができるかを提案した。WYM は国際交流を基に行う共修のプロジェクトである。参加者は誰もが、大会への参加を決定してから大会終了するまで、国内外の高大生・教職員と国際的な学術的交流・異文化交流を体験しながら多側面からの学び・挑戦・達成感などを経てプロジェクトを進展していく。参加者がこの過程で得るものを全て持ち帰って自分の住む地域・学校・仕事場の環境をよくするために何がどう使えるかをぜひ考えてほしい。その際には、Diversity、Inclusiveness、Equity も視野に入れてほしい。

特に今回の大会では、学生に Action plan 又は Action proposal を提案するよう求めた。13 の国から 45 組の発表を予定していたので、きっとたくさんのアイデアが共有されるだろう。そして、それらのアイデアを基にそれぞれの国と地域で今後も SDGs の達成に向けて動き続けてくれるであろう。

立命館大学 DR Kanduboda B. Prabath (カンダボダ B. パラバート)

4 WYM におけるディスカッションセッションとビデオ製作

今回はディスカッションセッション用に9つのルームを設定し、そのルーム毎にビデオを製作することとしました。(昨年は4ルームで4つのビデオ。) ルーム数を増やした結果として各ディスカッションセッションルーム参加者が分散し、ディスカッションセッション自体の運営がかなりスムーズになったのではないかと考えています。また、事前に各チームに参加ルームの振り分けを依頼していたことも効果的であったと考えます。(各ルームの正確な参加者数に関しては今後の報告を待ちたいと思います。)

ビデオ製作に関しては、次年度の WYM では参加全チームが行うべきではないかと考えています。そしてそれは自分たちのプレゼンを紹介するためのものであればと考えます。つまり、今までのようなスライドを効果的に活用しながら自分たちのプレゼンを原則ライブで行う従来からのプレゼンに加えて、次回の WYM で各チームは、事前にアピール用のビデオを作り、そしてそれを事前に公開することを義務化すべきだろうということです。そしてそうすることにより、各生徒の英語力と学際的な学びは一層深まると考えるからです。勿論、今回のような Q&A も行うべきだと考えます。確かに今回は、自分たちのプレゼンのテーマとは異なったテーマ設定でのビデオ制作を行ったチームもあり、製作者に関してはかなり負担になったことは事実でしょう。従って、次年度は自分たちのプレゼンに即したビデオを各チームが作成することとすればその意味での負担は少なくなると考えます。(次年度のディスカッションセッションの在り方は、ビデオを使うのかということも含めて、これから課題とすればいいと考えます。) ビデオ製作に関しては、製作に当たった生徒たちが、ビデオを作るために、今回の SDGs の 17 のテーマを、チーム内でより議論を深め、自分たちのビデオのテーマを決定しました。そのことによって、SDGs の議論の方向性からも、彼らの社会的見識を一層深めていくことができた

感じています。このことを踏まえ、ビデオ製作を通して、与えられたテーマをよりよく理解しそれに応じた素晴らしいプレゼンを行う意味から、次年度は各チームでそれぞれのプレゼン紹介・周知のためのビデオ作りを推奨したいと思っています。また、それに加えて、付随的ではありますが、そうすることにより、コースやクラス単位で WYM に参加している学校などでは、多くの生徒が関わる機会が保障され、プレゼン以外での貢献の場ができる側面もあります。ビデオ製作部門だけに参加する学校があってもいいかとも思っています。

立命館高校 浅川 行弘

5 受賞作品へのコメント

Room A:

“International Educational Cooperation through Fair trade” 「フェアートレードによる国際教育支援活動」

発表者：関西大学＋カンボジア教員養成大学シェムリアップ校

本プレゼンテーションは、SDGs 目標 4（質の高い教育をみんなに）について、国際協働の名のもとに、コロナ禍におけるカンボジアにおける教育問題を貧困問題と捉え、それを解決するための多様なアプローチを提言し、その実現に向かってフェアートレードをあげ、具体的かつ説得力のある手法で提言しており、今大会から導入された評価基準の「責任ある主張における共感力」を満たすプレゼンテーションであった。

具体的には、カンボジアの教員養成大学の利点を活かし、コロナ禍での学級閉鎖による緊急自宅学習方法について 63 名の教員調査を行った結果、スマホ教育が 7 割を占めているが、いまだに全体の自宅学習の割合は半数でしかなく、その原因を 1) 貧困、2) 教員の力量不足、3) 学習動機の低さ、4) インターネットの普及の低さ、と教員の立場から洞察に富む考察を加えている。

その具体的解決策として、フェアートレードによる援助金を提言しており、方法として、1) フェアートレード・マークの知名度（2 割）の向上、2) フェアートレード・ショップの大学祭でのコラボレーション、3) SNS 発信があげられている。そこで得られた資金を、1) 都市部でのスマホ配布と、地方での TV の設置、2) インターネット・アクセス設備の設置、3) 貧困層への教材・文具の配布、4) 将来を見据えた ICT 活用教育の普及、に活用するとしており、大学生の国際連携活動として十分実現可能性のあるアクションプランであり、これらが適格な英語で雄弁に述べられており、共感力のあるプレゼンテーションの範とすべきであろう。

Room B:

“Save the Water, Save the World!” 「節水して世界を救おう！」

発表者：奈良育英高等学校＋高雄市立三民高級家事商業職業学校

本プレゼンテーションは、SDGs 目標 6（水と衛生へのアクセス）達成のために、日台の水事情と問題点の指摘、ならびに各家庭内で実践している節水方法をあげ、そのうえで小学生の節水を習慣付けるための「魅力的な工作活動」を具体的に提示している。

そのことで、WYM の最重要目標である「世界は私たちの内にもある。他者と考えを深めることで、日常の中に SDGs の眼をもち、具体的な行為へと展開する」ことを達成し、同時に今回新たに設けられた評価基準である「責任ある主張：意見や気持ちを明確に示し、聴衆の強い共感」を得ている。

具体的には、1) 日台での年間の不均衡な降雨量の指摘、2) 解決策としてリサイクルとり

ユースの家庭での実践事例（エアコン・台所排水の活用，風呂の追い炊き等による節約金額の提示），３）小学校アクションプランでの節水啓蒙活動がそれぞれ明確に示されている．特に，小学校アクションプランでは，小学生にとって魅力的な命名（子豚の水銀行），ペットボトルのリユースによる吸水装置の具体的工作（工作そのものが楽しいことからくる「内発的動機づけ」）の工作手順動画，小学生にとって魅力的なシール集めによる節水活動の促進（シールを集めるという目的を達成しようとする「外発的動機づけ」），児童の家族への周知による節水観念の社会的波及効果，およびその延長としての国民的運動への道筋，がそれぞれ明示的に示されたことは大いに評価される．

Room C

“Mottainai: Your Unique Notebook” 「MOTTAINAI：あなただけのノート」

発表者：日本福祉大学附属高等学校＋フィリピン日系人会インターナショナルスクール
本プレゼンテーションは，今回の WYM の最重要目標である「世界は私たちの内にもある．他者と考えを深めることで，日常の中に SDGs の眼をもち，具体的な行為へと展開する」に則り，明確なストーリー性で聴衆を引き付け，国際協働による独創的で実行可能なアクションプランが展開され，これらが適格な英語で雄弁に述べられており，今回の最優秀作品として相応しいものといえる．

SDGs 達成目標は 12（責任ある消費と生産）で，環境保全運動の基本概念である「削減、再利用、リサイクル」を象徴する国際的に認知された MOTTAINAI をキーワードに，高校生の目線で日常的に使うノートの未使用部分の有効利用の具体的提言がなされ，「責任ある主張：意見や気持ちを明確に示し、聴衆の強い共感」を得ることができ，非常に説得力のあるプレゼンテーションになっている．

そこでは，デジタル時代における「手で書くこと」の重要性，および，両国における紙文化（折り紙，襖・障子，フィリピンの古紙活用伝統工芸品）についてそれぞれ再認識するとともに，余剰の紙を用いて高校生が身近にできることを具体的，かつ明確に提案している．

工作手順は，１）ノートの未使用部分の回収，２）新品ノートを手作りで工作，３）折り紙で表紙を装飾，４）学校購買部で販売，５）利益を慈善団体や組織に寄付である．

このことで，紙の貴重性を再認識し，資源を最大限に活用するための啓蒙活動とし，結果として他の SDGs 目標（目標 1：貧困対策，目標 13：気候変動対策，目標 15：陸上生態系対策）への波及効果をもたらすことにも言及している点は大いに評価される．

本プレゼンテーションでは，国際協働による両校の責任ある主張がなされ，アジア圏の聴衆の強い共感をもたらした功績は，20 年にわたる WYM の歴史の 1 ページに刻まれるものといえよう．

関西大学外国語学部 教授 吉田信介

6 ディスカッションセッション

今回9つのルーム（立命館中高(3)、立命館宇治、福井商業、奈良育英、大阪東、南山国際、立命館守山）に分かれてセッションが開催された。全て英語で運営するためハードルは高いが、多くの学校が手を挙げて実施したという事実だけでも素晴らしい成果と言えるだろう（去年は4ルーム。）

7月中にそれぞれのグループがSDGsに則った約3分のビデオを作成しYou Tubeで公開。その後、WYM参加者は9つのビデオを見て、当日どのルームに参加するのかを検討。また3つのベストビデオに投票をしてもらった。

南山国際のルームには約30名が参加（台湾やネパール出身の学生も。）「水道水を飲みますか？それともペットボトル等購入した水を飲みますか？」という質問を投げかけた。生命に欠かせない水、当たり前にあるようで当たり前にあるわけではない水に対して、誰でも答えられる内容にした。数名の参加者が質問に対する答えと出身国の事情などを語ってくれたおかげでうまくスタートしたが、その後、「顔を出さない」参加者に問いかけても返答が得られず議論が停滞してしまった。「日本には井戸水を飲む地域もある。」という早稲田本庄の望月先生の助け舟のおかげで、ディスカッションを最後まで終えることができた。

事前にリハーサルを行いディスカッションをどう進めるのか様々な想定をしておいたが、予想通りには事が進まないのもライブの醍醐味。「顔を出さない」参加者、おそらく英語に対して苦手意識のある参加者をどう巻き込んでいくかが今後の課題であろう。

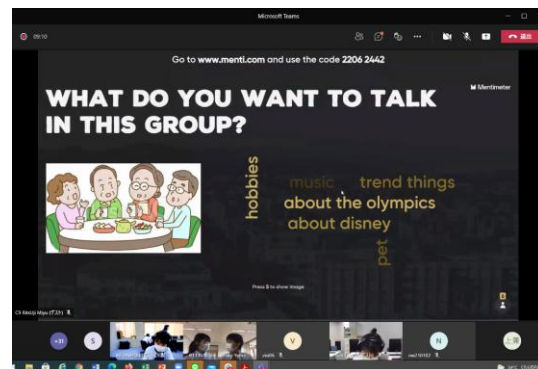
南山国際高等学校 西 亮

7 カフェトーク

昨年度のWorld Youth Meetingの報告において、「これまで経験してきたオンライン開催の国際会議においては、食事時間や休憩時間、会議終了後に、他校の生徒や海外生徒との楽しいおしゃべりができないため、お互いの関係が深まらない傾向があった」ことから、「大会テーマに無関係な自由なおしゃべりの時間、カフェトークを設定し、心理的な距離を縮めるのに効果的であった」ことを示した。本年度も昨年度に続き、オンラインとなったために、カフェトークを設定した。

本年度は、生徒向けの部屋を大学生1部屋、高校生2部屋、教員1部屋に拡大した。また、それぞれのルームの担当校を決めて、ファシリテーター的な役割を担ってもらうようにした。

ファシリテーター役を演じた生徒たちは、高校生用の部屋においても大人が入る余地はないほどに、工夫が見られた。例えば、メンチメーターなどのツールを利用して、参加者がどんな話題に興味があるかなどの情報交換、チャット欄を使つての意見の吸い上げなど、昨年には見られなかった短時間を効果的に使おうとする取り組みが行われた。明らかに、生徒たちのICT活用スキルがアップしており、これらのツールを使いこなしていくことが、コロナ禍におけるオンライン交流の標準になりつつあることを実感した。



設定時間は 30 分であったため、あっという間に過ぎ去ってしまい、これから話が盛り上がっていくところだったのにと、少々後ろ髪を引かれるような感じであった。しかし、生徒達がプロジェクトで使用しているインスタグラムのアカウントを交換するなど、将来にわたってつながっていく準備ができたようである。これらの交換を提案した生徒は、WWL における別の取り組み（全国高校生 SR サミット）で、アピールタイムを経験した生徒であった。



自分たちの活動を積極的に発信することで、社会にもアピールしようとする高校生が複数あったことより、WYM などの活動を通し世界に目を向ける生徒たちが成長し、カフェトークによってつながる機会を与えることができたことは高く評価できるのではないだろうか。

立命館宇治高等学校 上杉兼司

9 生徒の取り組みと変容

プレゼンテーションを作成し発表することはもちろんであるが、私としては、WYM に向けた活動を通じ、Diversity（多様性）を両国生徒が身に付け、磨いてくれることを大切に活動している。生徒アンケート・感想文によれば、WYM は国境、環境、カルチャー、学校、教科の垣根を越えた Borderless な学びの空間を実現し、SDGs を柱とした私たちを取り巻く様々な問題の共有を通じて、「Diversity を理解し高めることが出来た」という主旨が述べられており、概ね目標の達成に至ることができたと考ええる。

昨年度から続く COVID-19 の影響下、今年度も一切の国際交流に関わる教育事業を、直接的な対面無しに、ICT を駆使したオンラインのみで行う運びとなった。基本的なことであるが、国際交流・協働学習においては、ペア校も含め生徒・教師ともにどうチームビルディングを形成していくかが大切である。これについては昨年に引き続き、今年も課題であった。教育現場においては、SNS の活用について賛否両論あるが、国によっては SNS が公式的な連絡ツールとして活用されている状況もある。相手校の生徒から積極的な SNS の活用のアプローチをきっかけに、生徒レベルでの日常的なやり取りが、チームビルディングの形成に効果的であった。また、多くの生徒は、WYM 終了後も連絡を取り合うことを希望しており、継続的な国際交流のきっかけになっていることは、うれしい限りである。

今年度は、昨年度の経験を生かして、ICT のみしか使用できない状況のなかでも、ICT の利点の 1 つであるブレイクアウトルーム（Zoom）等を活用し、両校の生徒同士によるマンツーマンのスピーチトレーニングを行った。日本の生徒はオールイングリッシュという環境下でトレーニングを受けなければならず、ややハードルの高い取り組みであったが、生徒がお互いの状況を理解しあい、教える側（国外生徒）は『わかりやすい（英語）表現』でコメントを、また教わる側（国内生徒）は自分の困っている点を慣れない英語を活用し『どう的確に伝えるか』、シンプルなスピーチトレーニングを通じて協働的な深い学びに自然とつながったことも嬉しい限りである。この活動が“リスナーにわかりやすい英語プレゼンテーション“に一定効果を与えたと考ええる。

WYM が生み出す Borderless な学びの空間が、新しい発見、深い学びを実現している。Borderless な絆を大切に、引き続き、生徒、教師共に学びを追求していきたいと考える。

日本福祉大学附属高校 君塚 磨

10 異文化交流の視点から

2021年度のWYMは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて2年目のオンライン実施となったが、手探り状態だった昨年度に比べて、戦略的にオンラインでしかできない授業運営、学生指導、開催スタイルを追求してきたと考える。以下に詳細を述べる。

10.1 コロナ下でも「じぶんごと」として「個人としての顔が見える」交流を

オンライン実施により、昨年度に続き海外の各校から多くの参加が可能となった。また、オンラインでの定期的なプレゼン指導に日本と海外協定先校の学生の双方が参加して取り組む等、準備段階での交流度が高まったことも特筆点である。

海外ゲストが来日しないため、物理的な交流機会が激減したことは事実である。しかし例えば本学の学生実行委員会で海外参加者の情報を管理する係では、まず自分の自己紹介シートを作って送ったり、担当するゲストの出身地情報を他メンバーに向けて発表するなど、プレゼンの場以外でも、「自分を伝えたい」「相手を知りたい」という思いを持ってかかわる学生の自発的な取り組みがみられた。

一過性の海外交流イベントにとどめず、「〇〇さんと私との出会い」の次元へ落とし込む機会をいかに提供するかは、物理的な海外留学が難しい今の学生への教育の質保証において極めて重要だ。この点で、参加校間の関係蓄積と独自の協働スタイルが構築されてきたWYM運営と参加を通じて、オンラインでも学生が「じぶんごと」の異文化体験、「顔が見える」異文化交流をデザインできることは特に有意義である。なお、例えば各国の学校周辺状況の動画作成によるバーチャルフィールドワーク等が実現すれば更に「顔が見える」（日常的な生活感が伝わる、土地柄が見える）機会が増えるのではないかと期待を抱いている。

10.2「国際交流ファシリテーション演習」科目運営における留学生の活躍を後押ししたマネジメント

本学1・2年生約120名（約40名が留学生）が受講する同科目では、自ら手を挙げた2年生がリーダー役を担い、授業進行から係構成、進捗管理まで全プロセスにかかわる。今年度は、リーダー役に手をあげにくい留学生にも一緒に運営に関わってほしいという学生リーダー達が、早くから声をかけたり、係メンバー構成でも工夫がみられた。また授業では「身近な異文化」の観点から、留学生の出身地情報を留学生と日本人学生が協働プレゼンする機会を設けた。これは、ミャンマーはじめとする留学生の出身地の「今」へ理解を深め、多国籍な学生間の関係構築や、留学生が授業に積極的に参加する後押しとなった。

WYM本番でのプレゼンやMCなどでの留学生の活躍だけでなく、裏方的な諸係においても、責任感をもって力を発揮してくれた留学生がいたことには、このように、4月から地道に展開してきた授業運営プロセスが生かされたのではないかと考える。

日本福祉大学 国際福祉開発学部 教授 小國 和子

11 カンボジアとの協働制作

今回の相手校 Phnom Penh Teacher Education College の学生は、協働プロジェクトに真摯に向き合う素晴らしい学生たちだった。例えば、スライドや英語スクリプトの作成において、力強いリーダーシップを発揮してくれた。また、教員を交えたオンライン会議では、全員がほぼ毎回出席し、活発な意見交換をすることができた。日本側も、熱心なカンボジア学生から良い影響を受けたことは間違いないと感じている。

実は、活動初期は、果たしてプレゼンテーションまでこぎつけるのかと、大きな不安を感じていた。というのも、カンボジアメンバーの決定が本番の1ヶ月前であり十分な準備時間がなかったからである。更に、カンボジアと日本との学生間でプロジェクトテーマについて意見の相違があったため、予め日本側で進めていたテーマを断念して最初から練り直したからである。ただ、今振り返ると、意見の相違があったからこそコンフリクトを生み、その結果、両国の学生が話し合いを重ねることができた。

前回の WYM 振り返りアンケートでは、日本人学生が困難だと感じていたことは、「意見の折り合いがつかなかったこと・こちらの指示を受け入れてもらえなかったこと」であったが、今回は、この項目が困難点としてあがらなかった。つまり、「意見の折り合いをつけること」ができ、「自立的に前に踏み出す力」「英語で相手と交渉する力」などのグローバル社会で必要とされるスキルを、現実の場面で実践できたと、考えられる。また、私自身、前回の課題を踏まえ、相手校の教員と十分なコミュニケーションを取るように心がけた。この様に、WYM は、学生だけではなく教員の育成にも大きな役割を果たしている。

次の課題は、英語プレゼンテーションのパフォーマンスの向上だと、考えている。

京都産業大学 准教授 平野亜也子

12 海外ゲスト校の招聘参加体制

昨年に引き続き WYM2021 も再びオンライン開催となった。今年もアジア地区を中心に世界各国からの多数のゲスト校の参加があった。コロナ禍によりこのような国際交流イベントが多数オンライン開催されていく中で、海外との協力体制のノウハウがある程度形になっていることを感じられるようになった。

海外からの参加する際のハードルは、ネットワーク環境に関する対応が出来るかどうかが大い。WYM がライブプレゼンテーションを基本としているため、大会の二日間、所定の方法によってオンラインでリアルタイムに参加することが原則となっているためである。それでも対面交流がないため移動や宿泊に関する手配関係は必要がなく、コストやスケジュール調整の負担が少ない。総じて、海外からの参加のハードルは低くなっていると感じられた。

従前のように、来日してアクティビティを行い、大会当日に一堂に会してプレゼンテーションを実施することが出来ない中で、大会開催に至るまで、海外各チームと協力して準備を進めつつ、オンラインでのライブプレゼンテーションを想定して準備を進めるには、協働する学校間の担当教員同士で密な連絡が必要であった。また、国を越えての対面での話し合いやさまざまな情報共有ができないため、参加するゲスト校側の各国でも準備に関していろいろな取り組みを工夫して行った。例えば海外からの最大参加者数である台湾では、今年も現地でのワークショップを複数回開催して、参加者への情報伝達・共通理解と共に、それぞれのゲスト校での準備状況を確認していた。他の国々からの参加者もそれぞれのパートナー校とともにオンラインでの事前ディスカッションなどを行いつつ準備を進めていた。

今年も WYM が成功裡に終わられたのは、オンラインを十分に活用して大会の運営した結果である。さまざまなトラブルはあったが、長年にわたる国際交流活動で築きあげたヒューマンリレーションシップによるブレイクスルーが各所に見られた。一方で、二年にわたるオンライン開催で、直接交流でないと達成できない深い学びや気づきもあることも関わった教員は改めて認識している。

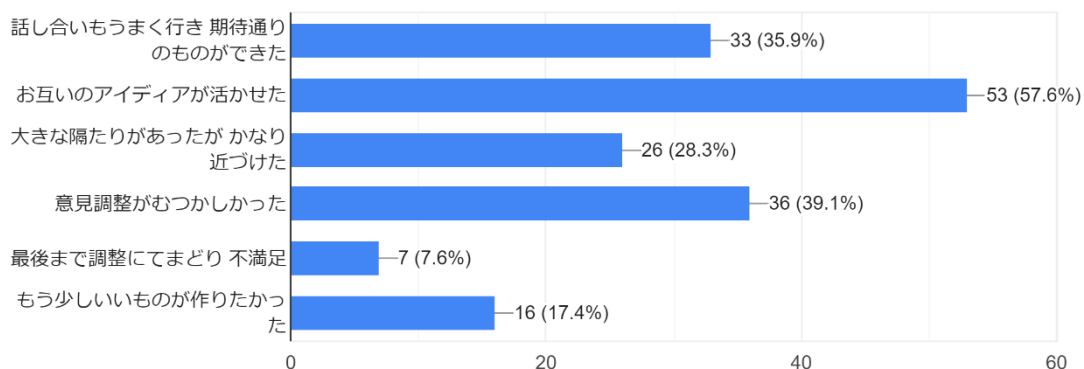
大阪市立東高等学校 主務教諭 池田 明

資料

1 参加者アンケート

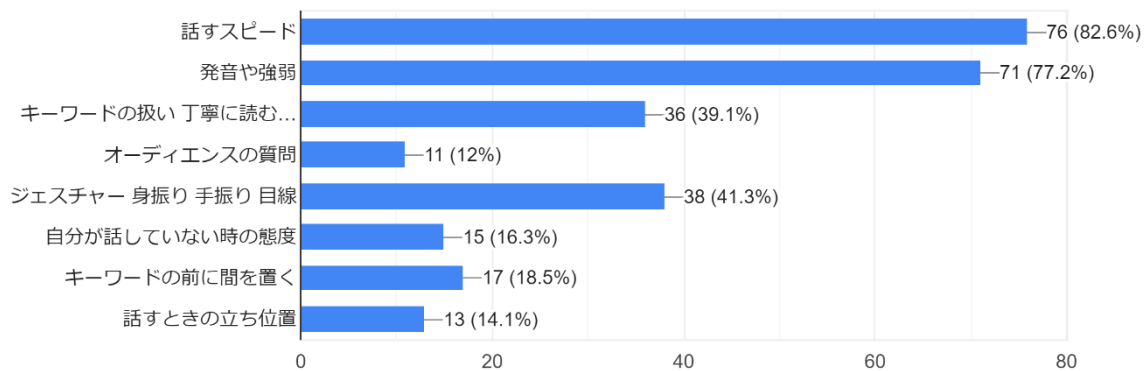
協働プレゼンテーションについて （複数選択可能）

92 件の回答



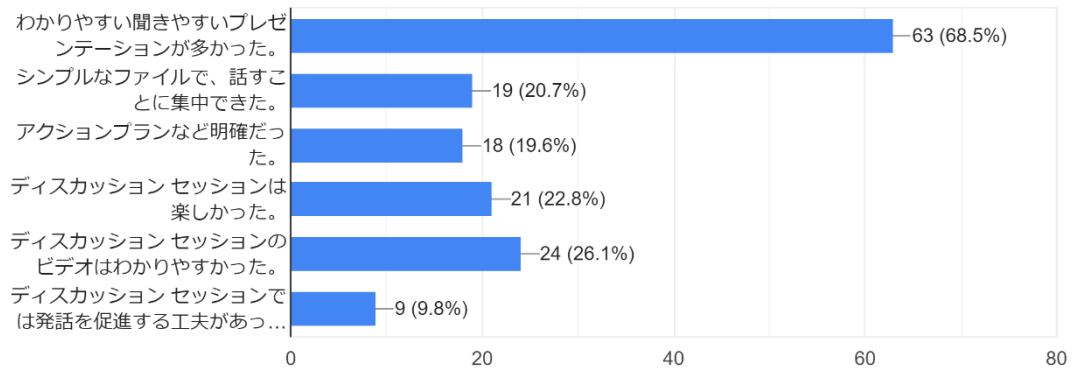
プレゼンテーションで気を付けていること 複数回答可能

92 件の回答

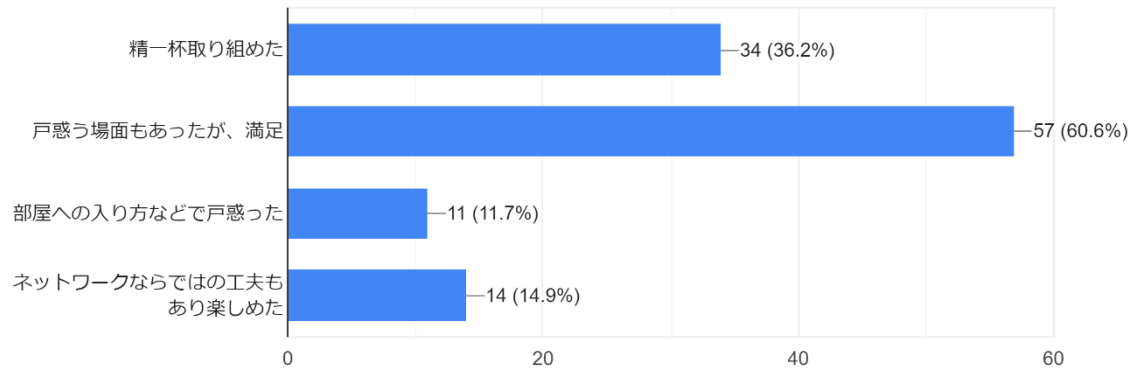


聴衆の立場、参加者の立場から

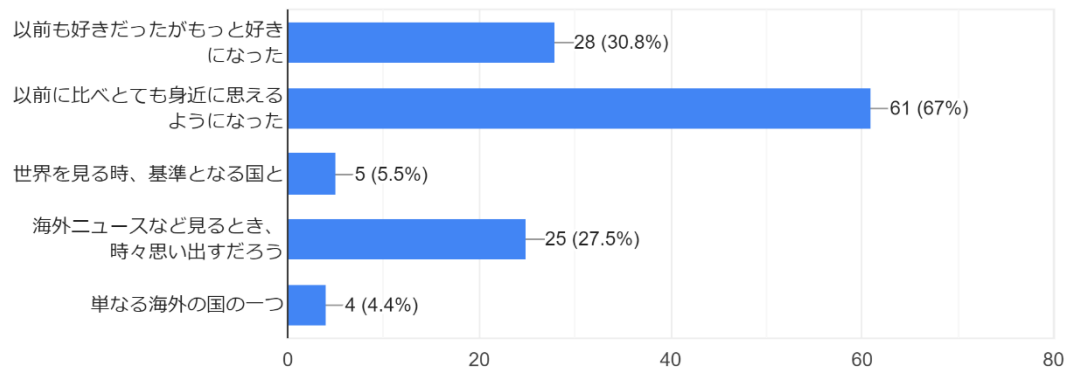
92 件の回答



対面ではなくネットワークでのプレゼンテーションでした。あなたの満足度は （複数回答可）
94 件の回答



一緒に取り組んだ国について 複数選択可
91 件の回答



文部科学大臣賞 受賞 作品

(日本福祉大学附属高校、ミンダナオ国際大学附属高校)

Mottainai; your unique notebook

Main

Good day everyone, we are the senior high school students from Philippine Nikkei Jin Kai International School and ...

Nihon Fukushi High School. Today, we'll discuss SDG#12 'Responsible Consumption and Production.'

1 Mottainai-main

"Mottainai"---Are you familiar with the term *mottainai*?

In Japan, *mottainai* is used in everyday conversation to express regret when something that could still be used is thrown away.

1 Mottainai-sub

International interest in *mottainai* was sparked by a visit to Japan by Wangari Maathai in 2005. Maathai was deeply impressed when she knew the term *mottainai* and decided to spread it to the rest of the world.

1 Mottainai-sub-zoom picture

She felt that this single term neatly expressed the basic concept of the environmental conservation movement: "reduce, reuse, recycle." She also thought that it encompassed the fourth important element: respect for the earth's limited resources.

2 Issue-main

300,000,000 tons. This is the amount of paper produced in the world per year; that's about 7 billion trees.

2 Issue-sub"What's the effect"

As a result of deforestation, we are prone to having floods, landslides, and climate changes. Every year, students tend to buy new notebooks for classes, and at the end of the school year, these notebooks are often left blank. This results in waste. This shows poor consumption despite the continuous mass production of paper worldwide.

3 Behavior-main

We asked students from the Philippines and Japan about their preferences of paper on different situations and the way of using notebooks.

3 Behavior-sub"Response"

We got 54 respondents from the Philippines and 314 from Japan.

3 Behavior-sub"Response"-zoom Graph 1

According to the results, there is no big difference in preferences except official documents and certificates, but we can see a big difference in the way we use notebooks. Japanese students tend not to use up their notebooks to the end.

3 Behavior-sub"Response"-zoom Graph 2 (5 sec.)

3 Behavior-sub"Response"-zoom Graph 3

Huuu. We should change our way of using notebooks.

4 Importance-main

Papers are useful in many ways. Also, in Japan, paper is used for cultural purposes such as *Origami*, *Fusuma*, and *Shouji*.

We cannot deny that the world is adapting to the digital age and even paperless offices will be possible in the future. However, going "paperless" is not always beneficial, especially in learning how to write. Studies show that it is more effective to learn with paper than with technology. Also,

learning with paper reduces the risk of eye damage.

4 Importance-sub"Recycling Efforts"

In Japan, recycling paper is imperative. We have the Paper Recycling Bin System, which gives us 1 JPY for one kilogram of old paper. Now, this system has reached over 65% of paper recycling and 85% of the collection of old paper. We have 76 paper recycling companies only in Aichi prefecture. In the Philippines, only about 20 paper recycling companies are present throughout the country. However, the amount of paper waste is more than that of consumed paper, and paper recycling is not given much attention. Nonetheless, Filipinos still try to be creative by using old paper for crafts.

5 Action Plan-main

Now, what can we do with the excess paper that is produced but never consumed?

We came up with a solution to this problem.

Mottainai, an action plan to focus on using unused papers from school notebooks.

At the end of the school year, students will be divided into groups to make re-new notebooks.

First, we will collect unused pages of notebooks in designated bins.

At the same time, we will discuss the sustainable development goals to let students know the purpose of this activity. The discussion will also provide them knowledge and motivation about this task.

5 Action Plan-sub"your unique notebook"

Then, the pages will be bound together by yarn, and turn into new notebooks. The cover pages will be decorated with *Origami*. Making the re-new notebooks will also increase the students' creativity. Through this activity, we are showing the common practice and cultures of both countries as well as producing new notebooks without harming our nature.

5 Action Plan-sub"your unique notebook"-zoom picture

The notebooks will be sold at school stores for the next school year. The profit from the notebooks will be donated to charities and organizations helping those in need.

6 Opinion-main

It's like hitting two birds with one stone. By starting this action, we will know the importance of paper and will start to use paper to its full capacity. This leads to helping people in need.

That means we will achieve SDG#1,12,13,and 15.

6 Opinion-sub

In our constant effort to recycle, we are taking a step closer to achieving sustainability and protecting mother nature. Let's continue doing this for our future! Thank you for listening!

6 Opinion-sub-zoom picture

参加校一覧

Participating Schools 58 Schools

日本国内 19 校

日本福祉大学

立命館大学

関西大学

中京大学

京都産業大学

立命館中学校・高等学校

日本福祉大学付属高等学校

南山国際高等学校・中学校

福井県立丸岡高等学校

福井商業高等学校

立命館宇治中学校・高等学校

奈良育英中学校・高等学校

神戸大学附属中等教育学校

名古屋市立名古屋商業高等学校

大阪市立東高校

立命館守山高等学校・中学校

関西学院千里国際中等部・高等部

奈良県立郡山高等学校

名古屋市立菊里高等学校

海外参加校 38 校

台湾 義守大学

台湾 輔英科技大学

カンボジア シェムリアップ・教員養成校

カンボジア プノンペン教育大学

カンボジア王立プノンペン大学

中国 温州大学

マレーシア科学大学

フィリピン国立大学

ミンダナオ国際大学

韓国 チョンナム大学

フィリピン シライインスティテュート高校

フィリピン シライ カレッジ

インド シュリラム・アバラビキャンパス

カンボジア・CIA ファーストインターナショナルスクール

インドネシア エスエムア ネグリ 3 高等学校

インドネシア エスエムア ネグリ 9 高等学校

高雄市立鼓山高級中學

高雄市立三民高級家事商業職業學校
高雄市私立樹德高級家事商業職業學校
高雄市私立立志高級中學
高雄市立高雄女子高級中學
高雄市立高雄高級中學
私立明誠高級中學
高雄市立高雄高級商業職業學校
高雄市私立瑞祥高級中學
國立鳳新高級中學
高雄市 私立明誠高級中學
高雄市私立三信高級家商學校
高雄市立前鎮高級中學
高雄市立中正高級中學
中山高級工商職業學校
高雄市立林園高級中學
国立中山大学附属国光高級中學
高雄市立仁武高級中學
高雄市立路竹高級中學
高雄市立高雄高級工業職業學校
ミンダナオ国際大学付属高等学校
タイ リイティア ワンナライ校

References

Official Site

<http://www.japannet.gr.jp/w2021/>